

日本の歴史 40

『唐物の文化史： 舶来品からみた日本』

河添房江著（岩波書店 岩波新書 2014）

本書の請求記号 210.18||Kaw

稲垣 宏行

唐物からものと言っても中国の舶来品だけではありません。それは海外全体も含んでいます。本書では、唐物という言葉の由来は、日本の最初の交易相手国だった加羅（現・朝鮮）から来たものだと述べられています。

平安文化を主に研究している著者は、本書の中で平安時代から明治時代にかけて、唐物とこれに関わった人々、書物などについて紹介しています。唐物と言えば、上流階級の道楽という一面もありますが、本書は、彼らがこれを権威と富の象徴としていた点に焦点を当てています。

奈良時代の聖武天皇は、正倉院宝物の唐物（舶来品）に彼ゆかりの品々が多く存在する通り、舶来趣味の持ち主でした。しかし、彼には積極的に遣唐使・遣新羅使を派遣して海外からの文物や制度を取り入れ、外交の拠点とする難波宮に足繁く通う国際派の天皇という一面も持っていました。

平安時代の嵯峨天皇も海外との交易に積極的でしたが、代表的な唐物の一つとして、日本に初めて伝来した「茶」があります。この茶の伝来は天台宗開祖の最澄が唐（現・中国）から茶の種子を持ち帰ったことがその始まりとされています。また、嵯峨天皇は、正倉院から唐物の楽器や屏風を多く借り出しましたが、著者はこの行為を「唐風な文化国家としての威厳を国際的に示すため」と見えています。

日本の代表的王朝文学『うつほ物語』『源氏物語』などにも唐物は登場します。『うつほ物語』は亡妻との間に7人の子を儲けながら、美しいあて姫あてに求婚する初老貴族しげのますげ、滋野真菅の話が出て来ますが、本書は真菅の人物像より、彼が唐物で大きな財力を築き、だからこそあて姫に求婚する余裕があった点に焦点を当てています。『源氏物語』の主人公・光源氏にも唐物が密接にから

んでいます。彼は唐物であるたきもの薫物たきものに和（日本）の要素を加えた調合を試みたり、唐物の紙に日本の字体である平仮名を使うなど、和漢の文化融合を図っていました。著者は、この姿勢が後の権力者である平清盛や足利義満などに強く意識されたと述べています。

室町時代、バサラ大名の佐々木道誉（高氏）も連歌や生け花など、多彩な芸事に長けた風流人でした。わけても彼が好んだのは闘茶会、お茶を飲んでその産地を当てるゲームです。しかも彼は、その会に十数個の唐物や茶道具を用意する財力を有していたと言われています。

バサラ大名と聞くと、風流というイメージから遠い存在に感じますが、戦国大名も茶道に傾倒しており、内実の無い権威に従わないという共通点を考えれば、道誉の風流ぶりも理解出来ます。

寛平6（894）年の遣唐使廃止や寛永16（1639）年の徳川幕府による鎖国のように、唐物の流入に規制がかかった時期もありました。しかし、流入は減少どころかむしろ増加の一途を辿ったといえます。鎖国した筈の日本に、海外から象がやって来たことすらありました。

唐物（舶来品）も時代が下るにつれて庶民層も入手可能になり、権威と富の象徴という意味合いは薄れて来たと思われます。それでも、高級品や稀少品と呼ばれる物はまだまだ魅力的です。今は見向きもされなくとも、尚古趣味がきっかけでもてはやされる物もあります。戦国時代、茶器が貴重品になったのも、足利家が愛用していた唐物の茶入が大名らに重宝されたことがきっかけでした。著者は主に権威と富の象徴という視点から描写していますが、それ以外にも異なった観点から解釈が可能な奥深いものだと思います。

いながき ひろゆき（司書・情報サービス課）